

# 願成寺報

令和二年九月十二日

〒四四〇・〇八二二 豊橋市東新町二十八番地

☎ 〇五三二・五二・九六〇一

## ■ 秋季彼岸・永代経のご案内

コロナ禍ですが、感染対策をして勤めます。

- ・出入口と窓を開けて換気します
  - ・お参りの際はマスクの着用を願います
  - ・堂内三〇名の人数制限をします
  - ・事前にご連絡いただければ席を確保します
  - ・お斎（昼食）は残念ですが中止します
  - ・午前・午後共お参りで昼食にお困りの方はご相談下さい
- 異例ですが、しっかり勤めて参ります。

ヒマワリ



九月 ~~\*\*\*申(金)~~ ~~\*\*\*~~ 餅つき草取り余 中止

十九日(土) 午後一時半 法要のみ

二十日(日) 午前十時 法要・法話

正午 ~~お斎(昼食)~~ ↓ 応相談

午後一時 法要・法話

法話 浄泉寺(岡崎市)  
住職 戸田恵信師

自分のあり方に 痛みを感じるときに  
人の痛みにも 心が開かれる

宮城 顛

八月末のある日、喉が痛くなり翌日に三九度の高熱を出しました。すぐさま接触者外来に電話して、内科・皮膚科と受診し、皮膚膿疱の細菌感染症と診断され、抗生物質を処方されました。熱はすぐに下がりましたが、コロナの不安は拭えません。自主的な自宅隔離の中で、医療の方々の心労が身に沁みました。これ以上の重圧の中で闘って下さっていたのだ！

感染防止は形だけで、気楽にマスクを使い回していた私にとって、その重圧は全く別物でした。

私の想像を超えた痛みや悲しみがある。

そんな当たり前なことを忘れて、知ったつもりで、他の人を評価したり、罰したりしています。

それは奇跡の出会いを、自ら放棄する態度・あり方でした。

知ったつもりでの狭い料簡を脱すれば、知りたいたい観察する態度になるでしょう。

必ず奇跡が見えます。

生きる慶びはそんなところにあるのだと思います。

たまたま、九月のカレンダーの法語と、コロナ禍と三九度の高熱がそれを教えてくれました。

ならばそれも奇跡、  
仏のはからいだったかも知れません。

弥陀ノ尊号トナヘツツ 信楽マコトニウル人ハ

憶念ノ心ツネニシテ 佛恩報ズルオモヒアリ

《正像末法和讃・親鸞聖人》

## ● 正信偈ノート ②⑧ ・ 結勸

書き直しを恐れず、今、思い浮かぶところを書き留める

弘経大士宗師等 拯済無辺極濁悪  
道俗時衆共同心 唯可信斯高僧説

黄色の勤行本の  
四十三ページから

弘経の大士・宗師等、無辺の極濁悪を拯済したまう。  
道俗時衆、共に同心に、ただこの高僧の説を信ずべし。

〔浄土真宗本願寺派・注釈版聖典より〕

- ・ 弘経大士 大経に依り 釈尊の本意を受け止め 弘めた菩薩
- ・ 宗師 真宗の祖師方（弘経大士と併せて七高僧の意）
- ・ 拯済 濁水もろとも拯い上げるように救済すること
- ・ 極濁悪 穢土中で自身の濁りに気づこうともしない私達
- ・ 道俗時衆 出家と在家の区別なく 同じ時を生きる一切の衆生
- ・ 共同心 互いに励まし合い 仏道を拓く心となって

### ・ 拯済という救済

バタバタとものがき苦しむから、逆に水が濁ってしまふ。その魚が落ち着きさえずれば、水は自然と澄んでくるのだ。濁ったからといって水を換えてしまったら、別の魚になるか死んでしまふかも知れない。魚はその水の中で育ってきたのである。

落ち着かせるには、その独りよがりの姿を鏡に映して見せるだけで良い。仏の救済はそんな風に行われるのだと思う。

### ・ 生きる態度が転換するということ

僧侶となって二十年余が過ぎた。真宗を勉強もして来たけれど自分の生き方が転換したかという全く自信がない。けれど、沢山の人に助けられながら生きて来たということは以前よりハッキリ意識するようになってきた。悲しい別れがあった時にも、出会わな

ければ良かったという迷いは無くなった。今でも別れた人から沢山の事を教えられている。

それが出来ているとは言わないが、目指すべき生き方が昔よりハッキリしてきたと思っている。

年来、念佛して往生をねがうしるしには、もとありしわがころをも思いかえして、伴同朋にもねんごろのころおわしましあわばこそ、世を厭うしるしにても候わめとこそおぼえ候へ。

『報恩講御書・第九通／親鸞聖人御消息集 抜粹』

長い間、念仏のいわれを聞き、浄土を思ってきた結果として、時代の濁りの中で、自身の身勝手さに気づこうとせず、自ら作り出した苦難を嘆き、慶ぶべき縁のちを賜りながら、諦めて投げ出そうとしていたことに気がつくでしょう。先達に習って念仏するなかで教えられたこの気づきを、有縁の方々と確かめ合い、励まし合って過ごす事こそ、其方と其方をかたどった世界を大切に作る生き方になるのだと忘れないで下さい。

〔筆者意識〕

狭い料簡で過ごしていた。「なんで私ばかりが」と孤独に向かっていたと気がつくことは時々ある。けれど直ぐに戻ってしまう。なので励まし合える朋がどうしても必要だ。互いに鏡として姿を映し合えれば、娑婆の豊かな歩みが拓かれていくのだと思う。

### ・ おわりに当たって

なんとか最後まで辿り着くことが出来た。毎回苦しく、ごまかした所も多かったし、課題は逆に拡がった。

母への対抗心が継続の力になっていた。方向は違っていたけれど、一生懸命勉強していた姿は忘れません。お仏壇に供えて感謝致します。出来得れば、説き伏せたかったなあ。

## 真慧(しんね)上人の御書(第三卷第八通)

### ・御書

一切の俗人の御流に帰して、後生たすかるべきようは、わが身は罪悪深重のものなれども、弥陀如来の御本願の力にて、南無阿彌陀佛を信じ、となうるきざみ、はからずに撰取護念の益にあずかり、いきたえ眼とずるとき、かならず報身果満の体をうるること、かたじけなきよとおもい、仏恩師恩をおおぐべきなり。

かく心得て念佛もうきんともがらは、十人は十人ながら、百人は百人ながら、極楽に往生すべきなり。一心一向の念佛者の、もしたすからずば、十方の諸佛は証誠のおん舌やぶれうせて、二度もとのみ口にいらじと誓言し、釋迦は佛にならじとのたまい、弥陀は正覺をとらじと誓いたもうなり。

ただ肝要は願力の不思議をききえて、名号を唱うべきなり。願というは名号、力というは相承直説なり。あなかしこ、く。

権大僧都法印真慧

### ・真宗高田派十世 真慧上人(1434-1512)

真慧上人は、応仁の乱から戦国時代へと向かう動乱の時代に活躍された御法主である。当時、本願寺には八世・蓮如上人があり、革命的な布教活動を行って不遇な民衆を束ねていった。高田派にも本願寺に転派する寺院があり、真慧上人は穩健派としてこれに對抗しつつ宗門を発展させ、現代への礎を築いた中興の祖である。

拠点を常陸国・本寺から伊勢一身体に移して、叡山天台宗・朝廷幕府・諸大名とも良好な関係を築き、宗門の安定を図った。

『顕正流義抄』を著して教への根幹を糺し、宗教儀礼等を整備し安心立命の姿を整えた。



### ・罪悪深重を教える念仏

人は失敗に沈んだり、成功の中に虚しきを感じたりすることがある。生き方を見つめ直した時、浄土の様にいのちを解け合わせる事が出来ず、自己中心の孤独を生きざる負えない自分に気づく。念仏には、その人に罪悪深重を知らしめて生き方の変革を促す働きがある。それを撰取護念の益と呼ぶ。

### ・自縄自縛する煩惱

仏の功德は無条件である。人に限らず、動植物から岩石に至るまで、全てがその功德の中にある。だから、ただこのいのちを謳歌すれば良いのだが、人は我儘にも獅子のように生きたい、ゴキブリは嫌だと自らに条件を付けて、不遇を煩い失敗に苦悩する。

念仏して仏の眼を賜れば、それはただ自らの煩惱で自分を縛っている独り相撲の姿であった。そして「だからこそ」の声が聞こえる。その苦悩を抱える貴方だからこそ済まれる価値がある。

釋迦弥陀二尊と諸仏は、苦悩を転じるように寄り添い、働きかけている。

### ・苦悩を破る願と力

例えば地図に線が引いてあって、道があると識っていても、そこに草が生え茂みに覆われていけば、歩んでいく気にはならないだろう。車の轍や足跡があつて道は道となる。

念仏の中に本当の安心を得る為には、その由来(＝本願)を聞くだけでは足りず、念仏に生きた人の姿を思わなければならない。相承直説とは、頭で理解する理論理屈ではなく、それが説かれた経緯、迷いの闇の中に光を見出し出した姿そのものなのだと思う。その姿を光とする生き方は、仄かでも後を照らすと確信できる。

この確信こそ「煩惱を抱えたままの安心」の本質であり、いのちを全うする手掛かりだと教えられる。

## 行事予定 令和二年秋以降

九月二十日（日） 秋季彼岸・永代経法会（戸田恵信師）

お馴染みの先生の情熱的な法話です  
お非時（昼食）なし  
午前十時～

十一月三日（日・祝） 本山納骨堂法会・団体参拝

コロナ感染防止のため中止しました

十二月五日（土） 報恩講

御開山聖人御恩に報いる法会です

お非時（昼食）未定

土曜日 午後一時半から

日曜日 午前十時から

毎月一日

月例会

\*十月は二日に変更します 午後二時～ 時間変更の場合等あります、

寺までご確認下さい

### 本山納骨堂・納骨受付／仏間読経は予約制

本山もコロナ対策中です

詳細は寺までご確認・ご相談下さい

納骨堂法会（十一月三、四日）

現在のところ コロナ対策を施して実施予定とのこと

バスでの団体参拝は中止ですが お参りできます

ご予約の方はご確認・ご相談下さい

高田本山定時ガイドツアー

ガイド付きで山内を散策します（好評です）

開催 土日曜・祝日の午後一時半から約一時間

定員 先着二十名

会費 五百円



## その後

○夏の終わりは、いつも手荒れに悩まされています。

水泡が出来て痒く、ひび割れたり、鱗のように剥がれたり。今年も膿疱となってビックリ、歳を取ったと実感します。

「歳をとるとは、そんな甘いものではないぞ」と、

先輩方から戒められそうで怖いです。

でも、お仲間になれるのなら、それはそれで楽しみます。

○今年も空き地にヒマワリを植えました。

長梅雨と猛暑で思ったようには育ちませんでした、

それでも頑張って花を咲かせていました。

「ヒマワリの花って、太陽の方向を向くんだよね」

その花たちは勝手な方向を向いていて自由にしています。

思えば、息子も犬も花も：みんな自由に気ままだ。

申し訳ない事ですが、それが願成寺の風土かも。

○最近、自分が楽しむよりも、楽しませる方に喜びを感じます。

お金が掛からないのは、勉強の楽しさを教えることです。

それで、リモート大学生の息子の物理の課題を解いています。

息子に解き方を教えて、スゴイだろうと自慢しています。

息子は悔しいのだろうなあ。

それが面白くて、自分の学生時代より真剣に勉強しています。

仏教じゃなくてゴメンナサイ。

息子は息子で、この夏に家庭教師のマネゴトをしました。

多感な中学生を相手に、教えることの難しさと

面白さを学んだようです。

なかなか頼もしい。

江戸時代後期、願成寺は寺子屋を開き、

常時の筆子百余人と、

吉田地方第一を誇っていたようです。

寺子屋願成寺の再興を考えてみようかな：

勉強の楽しさを知りたい人、集まれ！

